



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
医療保護施設・地域医療支援病院
総合病院 聖隷三方原病院
SEIREI MIKATAHARA GENERAL HOSPITAL

第217号

2024年1月1日発行

発行責任者 山本 貴道

編集者 木部 哲也

おおぞら

<http://www.seirei.or.jp/mikatahara/oozora/>

2024年1月1日 おおぞら

りました。普段の日常とは異なる音楽会の賑やかな雰囲気を感じて楽しんでも感じます。音楽会が終わって数日経っても、ある利用

者から「家康くんきたよ」「楽しかった」と何度か声を頂きました。今後も利用者が心地良い、楽しいと感じられるような企画を行ってまいります。

「ハロウィンメニュー」をご提供させていただきました。

「ハロウィン」は、もともと秋の収穫祭が起源であるといわれています。ハロウィンの前夜祭、この日の夜はあの世とこの世の境界がなくなり、死者の霊が現世の家族に会いに来ると信じられていたようです。

秋の収穫に感謝し、みんなで美味しい秋の味覚を楽しみましょう。配膳車もかわいく飾り付けをしました。

【献立内容】
ミートローフ、さつまいもの甘煮、大根のぼん酢和え、パンプキンババロア

栄養課
管理栄養士：原・渡瀬

おおぞらの 呼吸リハビリについて

所長 木部 哲也

おおぞらでは2022年から、呼吸専門のリハビリスタッフが専属として1名加わり、入所者や在宅支援利用者の呼吸機能評価、呼吸リハビリテーション（以下、呼吸リハ）に関わっています。今回は、おおぞらでの呼吸リハの取り組みについて紹介します。

現在、おおぞらの入所者は118名で、そのうち、日常的に呼吸ケアを要する利用者は約半数にのぼり、32名の方に常時人工呼吸器管理を行っています。超重症児（者・準超重症児（者）判定基準（以下、超重症児スコア）は、運動機能が座位までで、介護スコアとして、呼吸管理や食事機能、定期導尿や体位交換等を加味して作られており、25点以上を超重症児（者）、10点以上25点未満を準超重症児（者）としています。その基準では、超重症児（者）36名、準超重症児（者）19名になります。更に、在宅支援として日常的に呼吸管理を要

する方達の通所やショートステイ利用を受け入れており、必要に応じて、地域連携カンファレンスにも参加しております。呼吸機能の正確な評価やサポートには専門知識と技術、経験が不可欠であり、適切な呼吸ケアが生命維持や生活の質の向上に直結しています。

呼吸機能には、喉頭や気管・気管支など気道とよばれる構造の問題、酸素や二酸化炭素を交換する肺組織の問題、酸素や二酸化炭素を肺に運搬する循環の問題、肺を膨らませるため胸郭をコントロールする仕組みの問題など複雑に絡んでいます。利用者それぞれの病状の特徴に加え成長期の胸郭変形や繰り返す気道感染は心肺機能の発達に影響します。年齢とともに呼吸機能に予備力が乏しくなり、普段安定しているように見えても、感染などを契機に予想以上に状態が変化することもあります。気道吸引の回数やネブライザーの使用

頻度を増やすなど医療的ケアの変更を進めることで、これまでの生活をできるだけ維持できるよう呼吸リハが大きな役割を果たしています。

呼吸リハの最近の取り組みについて紹介します。前述した超重症児スコアに基づいて、利用者それぞれの医療的ケアの変更などを行っていましたが、スコアがそれほど高くないのに、呼吸のトラブルが多い例や、経時的な変化が大きい例を経験するようになりました。また、ショートステイ利用者については、普段の様子から分からない分、状態把握に時間を要することも多々ありました。そこで、呼吸ケアの必要度をもう少し詳細に見ていくことで、呼吸機能の変化をより効果的に捉えられないかと考えました。従来の評価項目に加えて、いくつかの項目を対象として、繰り返し検討しました。例として、側弯の重症度、実施可能な姿勢、口腔内の唾液の貯留状況、咳嗽力などです。それらの検討からより呼吸のケア度を反映する評価表を作成しました。その特徴は、比較的簡単に呼吸管理の支援の度



合いから呼吸状態を数値化できる点です。この評価表を用いることで入所者の呼吸状態を数値化し経年的な状態の変化を把握し、スタッフ間で情報を共有することで呼吸器感染症の予防にも寄与すると考えています。また、ショートステイ・レスパイト入院利用者など、普段の状況の把握に時間のかかる利用者の呼吸機能を適切に評価することで、呼吸ケアやリスク管理に活用しています。この取り組みは、第55回日本小児呼吸器学会優秀演題賞を受賞し、他の療育施設や医療機関からも関心をもたれています。

おおぞらでは、利用者の安全で安心できる生活を提供するため、このような取り組みを継続していきます。重症心身障害児（者）のケアにおいては、常に新たな課題が発生しますが、私たちはこれらの課題に向き合い、より良いケアの提供を目指しています。

障害児者歯科外来・診療ユニット 更新のご報告

おおぞら療育センター内で実施している障害児者歯科外来は、1973年5月の施設開設と同時にその診療が開始されました。以来、現在に至るまで浜松市歯科医師会の有志医師・歯科衛生士皆様のご協力により、施設入所者及び地域の在宅重症心身障害児者の歯科診療を脈々と継続することができましたことを感謝申し上げます。

この度、施設の開設50年という節目に聖隷福祉基金より費用を拠出いただき老朽化した歯科診療ユニット一式の更新工事を実施いたしました。ここに工事完了を報告させて頂くとともに、改めて関係者皆様に心より感謝申し上げます。



苦情解決委員会

2023年7月～9月
期間中公表を希望される
苦情はありませんでした。
(期間中受付した苦情は2件でした)



	7月	8月	9月	10月
ショートステイ 利用者数 (延べ利用日数)	48人(227日)	52人(267日)	43人(217日)	50人(263日)
放課後デイ 利用者数 (延べ利用日数)	19人(102日)	19人(131日)	19人(72日)	20人(76日)
実習者数 (グループ数)	0人(0グループ)	3人(2グループ)	0人(0グループ)	2人(1グループ)

ほくとの

日常生活

富田 道子

Aさんは、普段リビングで流れているCDをよく聴いています。最近家族の会から寄贈して頂いた、あの頃のCMソング集のCDを流すにこやかな表情で聴いています。特に「季節の中で」という曲では、サビに入るときの盛り上がりや伸びやかな歌声の響きに気持ちが高まり、手拍子や体を動かしながら声を張って歌っていました。他にも気候が良い日は散歩に出かけ、屋外の光や風を感じながらゆっくり歩いたり、平坦な道では職員と一緒に「いちに



いちに」とテンポよく歩くことも楽しんであります。歌やリズムへの興味関心があることから太鼓を使った活動を行いました。職員が三三七拍子で太鼓を叩くとAさんも同じように合わせて太鼓を叩きます。繰り返し叩くとリズムや太鼓の音の響きに徐々に気持ちのついてきて明るい表情になり、太鼓の叩き方も力強くなります。さらに気持ちのついてくると、Aさんのアレンジが加わり「トントコトントン」と軽快なリズム、合いの手のようなリズムなど色々なリズムを組み合わせるようにして叩いていました。また、三三七拍子の節目やリズムが変わるタイミングでリズムを変えて叩くことが多く、時には音に強弱をつけて叩くこともありました。職員が叩く太鼓の音に耳を傾けながら自分のリズムで叩き、職員も

Aさんと合奏しているような感覚になります。単純にリズムを合わせる楽しさだけではなく、Aさんと職員2人で違うリズムを叩きながらもテンポや音を合わせていくことや、その時の太鼓の音の重なりと響きに面白さを感じている様でした。

歌の活動では職員とたくさん歌を一緒に歌ってききました。「世界に1つだけの花」はAさんにとって馴染みのない曲ですが、職員が歌に所々合わせて歌っています。この歌を歌い始めたばかりの頃は、歌詞の語尾やサビのメロディの中で捉えやすい箇所を合わせて歌っている事が多かったです。しかし、活動の回数を重ねていくと曲の流れを感じながら聴いています。最初の「花屋の店先に並んだ」のメロディから「それなのに僕ら人間は」と曲の雰囲気が変わるところで顔を上げ、首を左右に振ってリズムをとっています。サビ前の「さうさ僕らは」の所では声を張り、はっきりとし

た口調でしっかり合わせて歌っています。そしてサビに入ると曲の盛り上がりに合わせてAさんの気持ちもぐっと高まります。より声を張って歌ったり、手拍子をしながらか持ちよさそうに歌ったりしていました。

Aさんにとって音楽は生活の中の何気ない楽しみになっていたり、活動では集中して耳を傾け人と合わせることや曲の流れを感じたりするなど大切なものです。今年度は、コロナ禍でできなかった演奏会やカラオケ外出なども取り入れ、よりAさんの楽しみや興味関心に繋がる活動を提供していきたいです。

1号館のフェスティバル

大橋 みのり

1号館では、8月に夏祭りを行いました。

日本のお祭りと言えば、和太鼓を思い浮かべる方も多いと思います。おおぞら療育センターには立派な大太鼓があるのはみ



なさん御存知ですか？今回夏祭りの会が始まる前からバチを手に取り音を鳴らしました。「ドン」と大きく響く音にびっくりするかなと思いましたが、意外にもみなさん耳を傾けて良く聴いていました。自ら大太鼓に近づいて行き、音を鳴らして楽しむ方もいました。夏祭りの会では大太鼓のリズムに合わせて、職員のウクレレとオカリナ演奏で歌を歌いました。利用者の隣では職員が鈴やタンブリンと一緒に鳴らし個別の触れ合いも大切に行いました。みんなと一緒に楽しく楽しい雰囲気になつていました。また、カラーシートも

した。途中で味を変えたりもしました。日常とは違う雰囲気を楽しみ夏祭りになりました。

2号館のフェスティバル

植野 舞雪

2号館では今回、夏を題材にした本『ばばあちゃん うみのおまつり』

「どんとせ」をパネルシアターで行いました。パネルシアターは、ばばあちゃんやぐじらなどの登場人物や背景などを語りに合わせてホワイトボードに貼り付けていきます。マグネットを貼っていくときのペタペタという音や剥がしていく様子に注目されていました。このお話はくじらを起こそうと動物たちが楽器を鳴らしてく場面があるのですが、その時に職員が登場人物たちと一緒に太鼓や鈴などを鳴らしました。楽器を鳴らすことのできる利用者には鈴やタンバリンなどを配り、かけ声や擬音語の部分に合わせて一

緒に鳴らしました。「どんとせ」と徐々にかけ声が大きく、長くなっていったり、楽器の音と重なったりすると、段々と盛り上がりつつ賑やかな雰囲気を感じられていました。鳴らした楽器は大きい太鼓や小さい太鼓、タンバリン、鈴、木魚など色々な音の種類や大きさのあるものを選びました。大きな音の出る楽器もあったため、普段聞かないような大きく響く音に驚かれた利用者もいました。その後の語りや楽器を鳴らしている職員の動きには注目されていました。花火が上がる場面では、ホワイトボードが反対側へと回転し、大



きく真つ暗な画面に変わりました。その様子をぐっと注視している方もいて、画面の変化も楽しさがあつたようでした。利用者や現場の職員など沢山の人が一緒に参加することで、普段の活動などとはまた違う楽しさや、賑やかな雰囲気があつたと思います。今回の様に利用者と職員とが一緒に楽しめるような企画を今後考えていきたいです。

3号館のフェスティバル

村上 龍

3号館では、『3号館音楽会』を行いました。1人でも多くの利用者に楽しんで頂くため、ほくと、あおば、ほのかの3つのゾーンでそれぞれ演奏を行いました。職員内で有志を集い、ほくと職員による合唱グループ、ギター弾き語りコンビ、おおぞらトーンチャイム部が演奏を行ってくれました。特別ゲストとして浜松市のマスコットキャラクター「家康くん」直虎



ちゃんも3号館フェスタに遊びに来て下さいました。『家康くん』と『直虎ちゃん』が登場すると、利用者の驚いた様な表情や笑顔がたくさんみられました。キャラクターに近付いて触れたり、じっと見つめたりして楽しんでいました。合唱グループによる「君をのせて」「瑠璃色の地球」、ギター弾き語りコンビの「日曜日よりの使者」「上を向いて歩こう」、トーンチャイム部は「日本昔ばなし」「春よ、来い」「糸」「ナウシカレクイエム」をそれぞれ演奏しました。どの演奏でも利用者の楽しそうな笑顔や真剣な表情でじっと演奏を見つめる様子があ